# 嵐が丘の愛

宮崎孝一

## 一

キャサリン（Catherine）とヒースクリフ（Heathcliff）があれほど愛し合っていながら、なぜついに結婚することがないのかは、「嵐が丘」（*Wuthering Heights*）を読む者の多くが不思議に思うところであろう。この疑問に対する答えとしてエリク・ソロモン（Eric Solomon）は、Incest Theme（血族相姦説）という仮説を提出している。[1] ソロモンによれば、ヒースクリフはアーンショー（Earnshaw）の隠し子だったのであり、キャサリンとは腹ちがいの兄妹に当たるのである。それだからこそ二人はいくら愛し合っていても結婚することは許されないのだという。ソロモンはこの説を裏づけるものとして幾つかの事項を作品の中から挙げており、それは必ずしも荒唐無稽の妄説とは言い切れない。また、作者エミリー・ブロンテ（Emily Brontë）がバイロン（Lord Byron）の作品を愛読し、強く影響を受けたという事実が、いっそうこの説を信憑性のあるものにしている。バイロンが異母姉オーガスタ・リー（Augusta Leigh）と恋愛関係にあり、これが彼の人生を狂わせる一因になったことは周知の事実である。そして彼の作品で歌われた恋、殊にマンフレッド（*Manfred*）における、マンフレッドのアスターティ（Astarte）に対する愛には、バイロンのオーガスタに対する心の状態を歴然と読みとることができるが、「嵐が丘」に「マンフレッド」の影響があることもまた、否定できない所である。例えば、死に臨んだヒースクリフが、牧師に来てもらって懺悔し、天国に導いてもらうようにというネリー・ディーン（Nelly Dean）の勧めをしりぞける個所は、マンフレッドが、「…わたくしが過去において何であったにせよ、また、現在どうあろうと、それは天とわたくしとの間のこと。人間に調停者になってもらおうとは思いませぬ」[2] と言って僧侶にすがることを断るのと軌を一にしている。

このように見て来ると、ソロモンの説はもっともなものの

ように思われもするが、ただし、この説には致命的な欠陥がある。それは、この見方に従うことになると、「嵐が丘」全体が非常に機械的な、深みのない作品になってしまうことである。出生の秘密の故に二人が結婚できないというのでは、あれだけの紙面をさいて書くほどの事がらではあるまいと思われる。また、ヒースクリフの、ヒンドリー・アーンショー(Hindley Earnshow)に対する悪しみは、嫡出子に対する庶子の嫉妬として説明できるにしても、ヒンドリー以外の人物たちに対するヒースクリフの憎悪と復讐は、あまりにも妥当性を欠いた、単なる八つ当たりにしか過ぎないものになってしまう。ヒースクリフに、絶対にキャサリンと結婚できない客観的条件があるのだったら、そのキャサリンが結婚した相手エドガー・リントン(Edgar Linton)と、その一族全部をヒースクリフが呪うことは、いささか的はずれであろう。

## 二

キャサリンがリントンと結婚するつもりだという話を立ち聞きして姿をくらましたヒースクリフが、三年後に見ちがえるほどりっぱになって帰って来てからも、キャサリンとヒースクリフとの間は結局隣人としての交際の域を出ない。これに関しては、モーム(W. Somerset Maugham)が次のように感想を述べている。[四]

「嵐が丘」は恋愛小説で、しかも今までに書かれたおそらく最も変わった恋物語であろうが、この変わった恋物語の中で、他のどの点よりも変わっていると思われるのは、二人の恋人が最後まで不純な関係に入らないでいる点である。キャサリンはヒースクリフを熱烈に恋していた。ヒースクリフの方でも激しく愛していたが、キャサリンの愛もそれに劣らなかった。自分の夫エドガー・リントンに対しては、やさしい寛大な気持ち(ただし、しばしば苛立たせられはしたが)をいだいていたにすぎない。そうであるとすれば、お互に身を焼きこがすほど愛し合っていたこの二人が、前途にどのような窮乏の生活が待ち受けていたにせよ、なぜ手に手をとって駈落ちをしなかったのか、不思議に思われる。また、なぜ真の意味での恋人同志にならなかったのか、不思議である。思うに、その育ちが原因で、エミリーは姦通というものを許しがたい罪と考えていたからかも知れない。

このモームの考えも、十分な説明にはなっていない。モームの言う、「育ち」とは、ブロンテ姉妹の父親が牧師であって、娘たちに宗教的教育を施したことをさしているのであろう。しかし、姦通を許しがたい罪悪と考えるのだったら、臨終のキャサリンを訪れたヒースクリフが、彼女と相抱くこともまた、宗教的な意味では姦通と考えるべきであろう。さらに、ヒースクリフが、キャサリンの墓をあばいたり、墓男を

買収して、自分の死後は、キャサリンの死体と自分の死体とがいっしょになるように、二人の棺の並んだ側の板をはずして置くように命ずることなどは、いっそう大きな罪悪と言えるであろう。エミリー・ブロンテに、表面的な意味でのキリスト教的信仰のないことは、「嵐が丘」の中で、キャサリンが天国へ行った夢をみたとき、天国は自分の安住の地ではないと感じ、地上へ帰してくれと頼んで天使たちを怒らせることなどの記述からもうかがわれる。[四]

## 三

キャサリンがなぜヒースクリフと結婚しないのかを、作品自体の中から探ってみよう。まず、第九章で、キャサリンは、ネリーに、自分がエドガーと婚約した理由として、エドガーがハンサムで、いっしょにいると楽しい男性であり、財産があること、そして自分を愛してくれるからなどの個条を挙げている。その一方、ヒースクリフはヒンドリーによって召使いの身分に落とされてしまったから、彼と結婚などすれば自分も堕落するだけであること、だから、エドガーと結婚してその財産でヒースクリフを援助してヒンドリーの支配から独立させてやるつもりであると言っている。このキャサリンの思惑は、山本健吉氏が「小説の再発見」で指摘しているように、[五]「金色夜叉」のお宮が貫一を捨てて富山に嫁ぐ口実を思わせるものがある。

しかし、ここの所までのキャサリンの言葉は、二十二歳の彼女のものとしてはあまりに幼稚であり、表面的な弁明に過ぎない。彼女の本心は次の言葉にこそ表われている。

「…あたしがヒースクリフを愛してるのはね、彼がいい男だからじゃなくて、あたし以上にあたし自身だからよ。魂が何でできてるかは知らないけれど、彼の魂とあたしの魂とは同じものなの。エドガーのなんか、月の光と稲妻か、雷と火ぐらい違ってるわ」

「…この世でのあたしの大きな苦しみは、そっくりそのままヒースクリフの苦しみだったし、あたしは初めから両方の苦しみを見つめ、感じてきたわ——人生でのあたしの大きな関心は彼だけだったの。ほかのいっさいが滅びてしまっても、彼さえ残っていれば、あたしは存在しつづけるし、ほかのいっさいが残っていても、彼が消えてしまえば、この宇宙はまったく私には無関係な所になって、あたしがその一部だという気はしないと思うの。エドガーに対するあたしの愛情は、森の木の葉みたいなもので、冬がくれば木のたたずまいが変わるように、時がたてば変わることはよくわかってるの。だけどヒースクリフへの愛情は、地底に横たわる岩のようなもので、見て楽しいというものじゃないけど、どうしてもなくてはならないものなの。ネリー、あたしはヒースクリフなのよ。彼はいつでも、どんなときでも、あたしの心の中にいるの——楽しみのもとととしてじゃないわ、それはちょうど、あたしが自分にとって

いつも楽しみのもとは言えないのと同じことよ。そうではなくて、あたし自身として存在するの。…」

キャサリンのこの言葉は、恋愛というものの真髄を述べたものと言えるであろう。そして、「あたしはヒースクリフなの」(I *am* Heathcliff!) という言葉にこそ、キャサリンの恋の秘密が見られよう。

キャサリンのヒースクリフに対する気持ちが再び語られるのは、第十五章の、キャサリンが産褥で死ぬ前のことである。エドガーの留守中にキャサリンの病床を訪れたヒースクリフが、彼女に対して期待通りのやさしい態度を取らぬことに焦立ったキャサリンはネリーに向かって次のように言う。

「そうら、どう、ネリー、あの人はあたしを墓場のこちら側に引きとめておくのに、ほんのちょっとやさしいところを見せるのもいやがるの。あたしはね、そんな愛され方しかしてないの。でも、いいのよ。あれはあたしのヒースクリフじゃないんですもの。あたしは、あたしのヒースクリフを愛しつづけるの。そしてあたしといっしょに連れて行くの。あたしの魂の中にいるんですもの。…」

ここでもまたキャサリンは、「彼はあたしの魂の中にいる」(…he's in my soul.) と叫んでいる。キャサリンがヒースクリフと結婚しようとしない理由は、正にこの点にあるのだ。ヒースクリフは、キャサリンの外側に存在するものではなく、彼女の心の中に入りこみ、彼女自身になっているのである。客観的な存在としてのヒースクリフは、もはやキャサリンにとって問題ではなく、彼女は自分の心の中のヒースクリフを愛しつづけるのである。(I shall love mine yet.)

ヒースクリフがキャサリンの心の中でこういう精神的なイメージに昇華されてしまっている以上、現世的な肉体の結婚ということは、彼女にとって何の意味もないことであり、あの世に旅立つに当っては、「自分のヒースクリフ」を道連れにすればよいのである。

## 四

「嵐が丘」の悲劇は、キャサリンの恋の様相が、他の人びとの理解を超えたものである点にある。第九章でキャサリンの告白を聞いたネリーは、「お嬢さまは、結婚にともなう義務をご存じないか、でなければ、とんでもない性悪の、無節操な娘さんですよ」と表面的な批判を下している。キャサリンの恋の相手ヒースクリフにもまた、到底キャサリンの心はわからなかった。第十五章で、死に臨んだキャサリンに向かって、彼は次のように言っている。

「…きみは一体どうして僕を軽蔑したんだ。いったいどうして自分の心にそむくようなことをしたんだ、キャシー。きみを慰める言葉はひとこともないよ。当然のむくい

なんだ。きみは自分で自分を殺してしまったんだ。…きみは僕を愛していた――そんならいったいなんの権利があって僕を捨てたんだ。どんな権利があったというんだ――さあ、答えてくれ――リントンにつまらん浮気ごころを抱いたからなのか。不幸も堕落も死も、神や悪魔のあたえるどんなものも、われわれをさくことはできないがゆえに、きみは、きみ自身の意志で、それをさいてしまった。きみの胸を引き裂いたのは僕じゃない――きみが自分で引き裂いてしまったんだ。そしてその際、僕の胸まで引き裂いてしまった。…」

キャサリンが自分を裏切ったとしか感じないヒースクリフが、彼女の夫エドガーをうらみ、また、若いころの自分を虐待したヒンドリーをうらみ、彼らの死後は、その子供たちを不幸に陥れることによって、叶えられなかった恋に対する復讐をしようとするのは当然であろう。また、エドガーと婚約する決心をしたときのキャサリンの告白の、初めの部分しか聞かなかったヒースクリフが、キャサリンが自分を捨てたのは自分に財産がなかったからだと思いこみ、嵐が丘とスラッシクロス（Thrushcross）の両家の財産を合わせ自分のものにしようと努めることもまた当然である。

しかし、先に見たキャサリンの心から見れば、ヒースクリフの復讐はすべて彼女の恋を理解しないことから生じた的外れのものであった。キャサリンの死後、ヒースクリフはキャサリンの幻を見たいと切望しながら見られず、あせりにあせるが、彼女の心を理解していない男の前に彼女の亡霊が姿を現わすはずもなかった。その苦しみをヒースクリフはネリーに次のように語っている。

「…あの女は十八年の間、夜も昼も――絶え間なく――情容赦なく――おれの眠りを邪魔してきた。……ほとんど目に見えそうな気がしながら、どうしても見ることができないんだ。身もだえするような恋しさに、ただ一目その姿を見たいという熱い憧れに、血の汗を流していたに相違ない。だが一目も見られなかった。生きている間よくそうだったように、相変わらずの悪魔ぶりを発揮したのだ。それ以来、時により程度の差こそあれ、おれはその堪え難い苦悩のとりこになっていた。地獄の苦しみだった。おれの神経はずっと張りづめなんだ。もしおれの神経が腸線のように、強靱にできていなければ、とうの昔に使いものにならなくなっていただろう。……まったく奇妙な殺し方もあるもんだ。この十八年間、希望のまぼろしでおれを釣り、一寸刻みどころか、髪の毛の何分の一かに刻んで、じわじわ殺して行くんだからな」(六)

しかし、十八年の苦闘の末に、ヒースクリフの心には、「不思議な変化」が生じてくる。彼は「毎日の生活にすっかり興味がなくなってしまい、飲み食いも忘れてしまうほど」(七)

になる。彼はあれほど熱心だった復讐の計画にも何の意味も感じられなくなる。次は彼がネリーに語る言葉である。

「なさけない結末じゃないか、ええ？…　おれは二軒の家をたたきこわしてやろうと、挺子とつるはしを手に入れ、ヘラクレスなみの怪力も養い、さていよいよ準備がとのい、あとはおれの意のままというときになって、どちらの家の瓦一枚もはがす意欲がなくなってしまった。昔の敵にもおれは負けなかった。今こそ奴らの後釜たちに復讐してやる絶好の時なんだ。やろうと思えばおれにはできる。邪魔だてする奴は誰もいない。しかし仇をとってみたところで何になるだろう。おれには打つ気がない――手をふり上げるのがめんどうなんだ。……おれは奴らを破滅させて喜ぶ気力を失ってしまい、もうおっくうで、なんにもならんのに人を痛めつける気になれんのだ。」(7)

しかも、ヒースクリフのこの現実に対する無関心は単なる虚脱状態ではない。彼はほとんど眠りも食べもしないのに、キャシーが言うところによると、「ほとんど朗らかで陽気だと言っていいくらい……ひどく興奮して、なんだか有頂天」(8)な様子である。彼はネリーに言う、

「…今日は天国がすぐ先に見えている。もう目の前に三フィートとは離れておらんのだ」(9)

また、

「食いも眠りもできんのはおれのせいじゃない。何も計画的にやってるわけじゃないんだ。……だが今お前がそうしろと言うのは、ようやく岸のそばまで懸命に泳ぎついて来た人間に、一休みしろと言うようなものだ。おれはまず岸にたどりつかなきゃならん。休むのはそれからだ」(10)

やがて四日の絶食の後に死んだヒースクリフの死に顔は、「まるで生きているようにかっと目をひらいた歓喜の凝視」を宿していた。

長年の現実的な苦闘の末に、ヒースクリフはついにキャサリンと同じレベルに達したのであった。今こそ彼はキャサリンと合一できる準備ができた。しかし、この恋の成就は、地上の猥雑さを超えた天上においてのみ見られるべきエレメンタリーなものであった。

「嵐が丘」の恋は、生涯結婚することなく、恐らく具体的な恋人を持つこともなく三十歳で死んだエミリー・ブロンテの心にはぐくまれた、愛というものの一つの窮極の姿を示しているのである。これを、先に見たエリク・ソロモンやサマーセット・モームのように、現実に捉われた眼で解釈しようとしても、その尺度に合わぬ要素が出てくるのは当然であろう。

（註）

㈠ Eric Solomon : *"The Incest Theme in Wuthering Heights"* in *Nineteenth-Century Fiction*, vol. XIV, No. 1.

㈡ *Manfred*, III. i

㈢ W. Somerset Maugham : "Emily Brontë and *Wuthering Heights"* in *Ten Novels and Their Authors.*

㈣ 九章

㈤ 山本健吉「小説の再発見」六七ページ

㈥ 二十九章

㈦ 三十三章

㈧ 三十三章

㈨ 三十四章

㈩ 三十四章

(一) 三十四章

（作品の訳は河野一郎氏のものによる）